

## Some Ideas for Teaching English in English

五城目第一中学校 伊藤 久

### 1 はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、中学校でも「英語の授業は英語で行う」ことが基本となる。教師が英語で授業を進めるとともに、生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することが求められる。授業の中心は「英語による言語活動」であり、授業自体が実際のコミュニケーションの場となる。このことは、「将来使わないのに、なぜ英語を学ぶのか」といった、生徒の短絡的な質問に対する答えの1つにもなる。つまり、英語は「将来」以前に、まず実際のコミュニケーションの場である「授業」で使うということである。さらに言えば、英語は「将来使う」ために学んでいるということを生徒たちに語り続ける必要がある。都会や地方に関わらず、これからのグローバル社会の中では、広い視野と柔軟な発想力や創造力を発揮して、身に付けた英語を積極的に使っていかなければならないからである。

では、実際に「授業」をどう組み立てるかということになるが、それは教師の授業構想力にかかっていると言えるだろう。私自身が授業構想の段階で特に意識しているのは、授業や単元の「つながり」である。本校で使用している教科書 Sunshine English Course 1 を例に取れば、Program 2 の開始段階において、最終的に My Project で自己紹介を行うことや具体的なやり方を生徒に提示してイメージをもたせ、その目的達成のために各 Program で表現を学ぶという一連の「つながり」である。したがって、例えば第1時前半に新しい文法を導入し、後半はその文法を使うためだけの活動をする、第2時前半にまた新しい文法を導入し、後半はその文法を使うためだけの活動をする...といったような単発的な活動は行わないようにしている。このような活動も「英語による言語活動」になるのかもしれないが、活動間に何のつながりもないとすれば、個々の活動としてはどんなに素晴らしいものであっても、結局質の高い言語活動とは言えないのではないかと考える。それゆえ、つながりのある「英語による言語活動」を念頭に置いて授業構想を練るようにしている。

本稿では、英語による言語活動例と授業を英語で行いやすくするための工夫を紹

介させていただいたのち、私自身の授業における英語使用度にもふれてみたい。

## 2 英語による言語活動

英語による言語活動の例として1年生の授業を紹介したい。授業の核になっているのは「英会話」という活動である。これは、各 Program で学習する新出文法に関して、「肯定文、疑問文、否定文」の3つの形を含めた会話である。以下は1年生の Program 3 の英会話例を最もシンプルな形で表したものである。

- A: Hi, ~. I play baseball. (肯定文)  
Do you play baseball? (疑問文)
- B: Yes, I do. I play baseball, too. (肯定文)  
[ No, I don't. I don't play baseball. ] (否定文)
- A: Oh, you play baseball, too. (相づち)  
[ Oh, you don't play baseball. ] (相づち)

生徒はA役およびB役として、下線部を自由に替えたり内容を膨らませたりしながら会話を行う。下線部の他の表現に関しては、教科書付属のアクションカードなどを活用する。そしてこの「英会話」をもとに、Programの最後でALTと生徒との1対1の「英会話テスト」を行っている。このような形で全てのProgramを組み立てて生徒の英語使用量を増やし、まとめの活動であるMy Projectにつなげている。例えば1年生なら、Program 2 → Program 3 → Program 4 → My Project 1 (自己紹介) といった具合である。単発的な言語活動は行わず、各 Program で身に付けた技能を最終的にMy Projectで発揮することを目指している。実際にMy Project 1では、生徒1人1人が級友の前で自己紹介を行った。教室を左右2つに分け、それぞれに話し手1名を立て、他の生徒が聞き手となった。話し手は原稿を持たず、手にするのは「自己紹介カード」(小学6年の外国語活動で作成)のみである。また、聞き手に対して問いかけることを課した。一方の聞き手に対しては、机上に一切物を置かず話し手を見ること、必ず話し手に質問することを課した。終了後は、聞き手から話し手に対し、よかった点と建設的なアドバイスを日本語で伝えることとした。教師は

進行役をしながら評価を行った。結果として、「英会話」や「英会話テスト」を通して毎時間のように英語でのやりとりを重ねてきた成果が発揮されていた。

### 3 授業を英語で行いやすくするために

今後、授業を英語で行うことが基本になることから、授業を英語で行いやすくするための様々な工夫をぜひ共有したいものである。私なりに以下に3つの提案をしたい。

#### 3. 1 授業の開始で、「英語モード」にスイッチを切り替える

私は授業の開始時、リズムマシンを使用して同じリズム音を流すようにしている。さらにこのリズム音に合わせてチャンツのように、あいさつ、天気、曜日、日付、単語の発音練習や表現練習も行っている。こうして、一旦英語モードの雰囲気を作ってしまうと、教師側も英語で進めやすくなる。実際、運動後や午後の授業などで生徒が疲れているようなときでも、このリズム音のおかげで学級全体が英語モードに切り替わることも多い。

実際のところ、多くの生徒が英語の授業以外、ほぼ英語を使わない1日を過ごしている。したがって、1日50分しかない英語の授業の開始で、いかに素早く英語モードにスイッチを切り替えられるかが大事なポイントになると考える。

#### 3. 2 生徒が視覚的に気付けるようにする

私の授業では、ホワイトボードを毎時間教室前方に置いておき、適宜使用している。そのボードには、生徒が混乱しやすい「be動詞と一般動詞（現在形・過去形）」、「三人称単数現在形の（e）s」、「代名詞」を整理して書いておき、必要なときに示しながら全体で要点を共有できるようにしている。この要点は、人間の両手の形を利用してまとめていることから「ハンドパワー」と呼び、どの学年を担当しても活用している。

教師が英語で授業を進めるのは、生徒の英語使用量を増やすことが目的である。したがって、教師の長い説明による生徒の聴覚的負荷を軽減するためにも、生徒が視覚的に理解できる補助教材を用意しておくことが有効だと考える。

### 3. 3 文法事項の導入を生徒とのインタラククションで行う

新しい文法事項の導入は、生徒とのインタラククションの中で行うようにしている。例えば「三人称単数現在形」では、小学校外国語活動で使用されている Hi, friends を用いながら生徒とインタラククションを行ったり、クラスの生徒を He, She としてインタラククションを行ったりした。「現在進行形」では、ALT とのデモンストレーションを生徒とのインタラククションにつなげたり、「how to ~」では、漢検の漢字を利用して生徒とのインタラククションを行ったりした。また「受け身形」では、ふるさとに関連する情報をクイズ形式にしてインタラククションを行った。その他、絵カードやぬいぐるみ、玩具などの小道具を適宜用いながらインタラククションを行った。

こうした生徒参加型導入は、生徒の英語を引き出しやすく、生徒の気づきを促すことにつながる。また、生徒の理解を視覚的に助ける補助教材を適宜用いてインタラククションを行うことが大切だと考える。

## 4 自分の授業は英語で行っているか

自分の授業の現状を知るために、1年生の授業を数時間分ビデオ撮りし、その中の1時間分を全て書き起こすなどして大まかな分析を行った。専門的な授業分析ではないが、自分自身のことについては以下のようなことが分かった。

- ・ 英語使用頻度 授業で差はあるが、6～8割程度。
- ・ 指示など 短い表現を繰り返し使用していることが多い。
- ・ 自分のくせ 「英語+ね」が多い。1時間中、67回。  
例 For example ね, How about this ね, Let's try ね。
- ・ 自分の弱点 生徒からのとっさの質問に対して日本語を使う。

書き起こしの作業は膨大な時間がかかるので頻繁にはできないが、自分自身の授業を観ることは多くの気づきと示唆を与えてくれる。そのため、現実的に可能な範囲で、定期的に自分の授業をビデオで撮って観るということを最後の提案としたいと思う。